

# 自死遺児の悲しみと悲哀の仕事

遠藤 恵子\*

## Grief and Mourning among Children Whose Parents Have committed Suicide

ENDO Keiko\*

The purpose of this paper is to describe some phases on grief and mourning among children whose parents have committed suicide. I pointed out three phases. First, the grief for suicide have characteristic feelings, mainly the anger, fear, self-reproach, and stigma identity, comparing with that for cancer. Second, it is difficult to facilitate mourning by family members talking. Third, they facilitate often their own mourning through “Jibun-wo-katarou”, the meeting that they are hearing and talking about their own life history and story on grief, daily life and family etc.

---

(\* 城西国際大学 助教)

## はじめに

親しい者との死別は、さまざまな、深くつらい感情を呼びおこし、遺された者に「悲哀の仕事」を課す<sup>(1)</sup>。その死別の悲しみと悲哀の仕事は、その親しい者の死が病死か、不慮の事故死か、災害死か、自死かによって異なった様相を呈する。

2000年春、あしなが育英会<sup>(2)</sup>の奨学生である、幾人かの自死遺児が、作文集『自殺って言えない』を刊行した〔自死遺児文集編集委員会他編2000〕。自死遺児とは、自死によって父親か母親を亡くした子ども（成人している学生も含む）をさす。作文集は、社会において大きな反響を呼んだ。自死遺児たちは、メディアを通じて、自死遺族の悲しみ、苦しみを社会にうったえ、自死遺児支援、自殺防止を呼びかける活動を行い、2002年秋に『自殺って言えなかった。』という本を出版している〔自死遺児編集委員会他編2002〕。<sup>(3)</sup>

そのようななか、あしなが育英会の委託を受けた調査グループは、同会の大学・高校奨学生を対象とした自死遺児調査を、2000年から2002年にかけて行った。筆者を含めた調査員は、奨学生のつどい、自死遺児シンポジウムなどで、自分史語りを聴く機会を得、そして、そこで得た知見をもとに質問票を作成し、調査データを得た。

本稿は、自死遺児調査データ、作文集にもとづき、自死遺児の死別の悲しみ、悲哀の仕事の様相を見ることとする。すでに、副田によって、自死遺児調査データの紹介、自分史語りや作文集をもとにした重要な論点の提起が行われているが〔副田2001〕〔副田2002〕、本稿は、質問票調査データ結果、2000年、2002年の作文集を合わせて考察する。

## 1. 調査の概要

自死遺族に、死別体験がどのようなものであるか、容易に聴くことはできない。しかし、自死遺児調査を始めた当時、自死遺族の悲しみのありようがわかる記録は、カーラ・ファインの翻訳書が確認できた程度である〔Fine 1997〕。それゆえ、2000年、2001年の夏、あしなが育英会が大学、高校奨学生等を対象に毎夏行っている「奨学生のつどい」に参加した。

「奨学生のつどい」について大学奨学生のつどいを例に概観する。大学奨学生のつどいは、毎年7月末から8月初めにかけて5泊6日、一ヶ所に集合し、一班あたり二十名前後で、ゲーム、ハイキング、語り合いなどの日々の行事、寝食をともにして過ごす。

「自分を語ろう」はさまざまな行事のひとつであり、3日目に行われる。そこでは、十数名で車座になり、全員で手をつなぎ、目を閉じて、心を落ちつかせる。まず、リーダーが、

親の死の状況、そのとき、それ以後の遺された親や兄弟姉妹たちのこと、それらについて自分が感じたこと、苦しんだこと、自分のこれからについて悩んでいることなどを話す。その後、「話したいと思える人から、話したいと思えることだけを話してほしい」と促し、一日かけて、それぞれの親の死、遺された家族の様子、そうしたことによって自分が感じていること、苦しんでいること、悩んでいることなどを、めいめいが話せることだけをひとりずつ、話したいという順から話していく。そして、同じ班の仲間たちの話をじっくりと静かに聴いていく。

高校奨学生をつどいは、8月中旬に、奨学生を10ブロックに分け、9地区で実施する。大学奨学生をつどいとの大きなちがいは、日程が短いことと一班あたりの人数が少ないことの2つである。日程は、3泊4日と大学奨学生のそれより2日短い。そのため、「自分を語ろう」は2日目の午後から夜にかけて行う。また、人数は10～15人程度である。

筆者を含めた調査員は、大学奨学生をつどい、高校奨学生をつどいに参加して、遺児たちの「自分を語ろう」を聞く機会を得た。このほかに、2001年、全国数ヶ所で開かれた自死遺児についてのシンポジウムで自死遺児が話した自分史を聴いた。このような、つどいへの参加、および自死遺児シンポジウムなどでの自分史の傍聴、文集の検討をもとにして、調査グループにおいて質問票を作成し、2001年夏、つどい全会場において、最終日、参加した奨学生たちに質問票を配り、答えてもらった。

質問票調査の概要はつぎのとおりである。総数は1525名である。そのうち、自死遺児は95名である。総数1525名には、自死遺児95名、がん遺児506名のほかに、がん以外の病気遺児、災害・震災・事故で親を亡くした遺児、病気や災害などで親が重度後遺障害の家庭の子どもなどを含んでいる。自死遺児において、性別は男性49.5%、女性50.5%、学校は高校生・高専生82.1%、大学生・短大生・専門学校生17.9%である。

## 2. 怒り・怖れ・自責—死別の悲しみの様相—

自死による親の死は、遺児たちにどのような感情をもたらしているか。また、遺児は亡くなった親についてどのような感情をもっているのか。

あしなが育英会の奨学生につぎの質問をおこなっている。「お父さん（お母さん）が亡くなられた直後から今までの間に、あなたは、つぎのような気持ちになったことがありますか。」いくつでも回答を許した。結果は表1のとおりである。一人平均4.12個の回答が

みられた。限られた時間で回答しているため、とても強く記憶にのこる感情を4つほど回答したものと思われる。

多く答えられた気持ちから、順にみていきたい。もっとも多い回答は、「悲しかった」63.2%、「つらかった」58.9%、「さびしかった」56.8%である。悲しい、さみしい、という悲しみの感情や、つらいという悼みの感情を、多くの自死遺児が答えている。

次いで、「納得できなかった」47.4%がある。長期の闘病後の死が想定されるがんで親を亡くした、がん遺児と比較してみると、がん遺児では27.1%であり、親の死に理不尽な思いを抱えている自死遺児の比率は20.3ポイント大きい。

「納得できなかった」という思いは、どのようなものか。高校3年生で父親を亡くしたナオユキくんは、亡くなった父を起こそうとして、生き返らせようとして、繰り返し遺体を叩いたことを、つぎのように述べている。「ぼくはただ、涙があふれてきた。まわりに人がいるにもかかわらず、大声で泣いていた。そして、何度も何度も起こそうとして硬くなった父の胸を叩いた。顔を見ると、ただ眠っているようだった。しかし、首には細いロープの痕が深く残っていた。そのとき、父はみずから命を絶ったのだとわかった。／火葬される前夜、ぼくは父の体を何度も叩いた。どうにか心臓が動いてほしいと願い、何度も何度も叩いていた。叩きながら父の体が硬くなっているのを感じ、余計に涙があふれてきた。ふだんから、父が仕事へ行く時間になると、ぼくが父を起こしていた。父は寝起きが悪かった。しかし、寝起きが悪くてもいいから、怒られてもいいから起きてほしかった。明日になると父の体は燃えてなくなってしまう……。そう思うと叩く手が止まらなかった。」

表1 親の死に対する気持ち (M.A) ×死因別

	総数	悲しかった	つらかった	さびしかった	こわかった	自分も死ぬのではないかとおもった	同情してほしくなかった	同情してほしくなかった
全体	(1525)	55.3	51.5	51.4	24.1	9.0	7.5	31.0
自死	( 95)	63.2	58.9	56.8	34.7	18.9	8.4	30.5
がん	( 506)	60.5	51.8	58.7	23.9	10.7	4.0	34.2

  

	納得できなかった	あきらめがついた	自分ではなにもできなないと感じた	ひとりぼっちだと感じた	このような気持ちになったことはない	覚えていない	N.A
全体	29.1	7.7	21.0	14.6	5.7	8.1	3.4
自死	47.4	11.6	21.1	22.1	5.3	4.2	—
がん	27.1	7.9	19.2	16.6	3.0	8.3	1.4

[2002: 14] しかし、遺体は生き返らない。叩くことで、その死の理不尽さを感じているように思われる。

自死に理不尽な思いを抱く遺児が多いのは、親の早すぎる死という思いに加えて、自死の意味づけが、ほかの死の意味づけと異なることが考えられる。死とは、病気、事故、災害などによって、他律的に訪れるもののように感じられている。しかし、自死は、自ら死を選んだように感じられる。だからこそ、なぜ死にいたったのだろう、死を選んだのだろうと、わたしたちは、その死や故人に理不尽な思いをいだくようである。

「こわかった」という思いをもつ自死遺児も多い。その思いを答えた自死遺児は34.7%である。がん遺児では23.9%である。自死遺児が答えた割合は10.8ポイント大きい。ある遺児は、友だちに部屋を見せようと思いドアを開けたところ、父が首を吊って亡くなっている姿を発見し、その姿を目の当たりにした瞬間、驚きとともに怖くなり、大声で泣きながら家の外に出た [2000: 13]。べつの遺児は、遺体をきれいに拭いてあげようと思って触れたとき、その冷たさに怖くなって逃げ出した。

しかし、自死遺児が怖れの気持ちを多く答えているのは、周囲の思い、まなざしを思うことによるところも大きいと思われる。かれらは、親の自死について、学校の友だちや近所に知られること、自死遺児活動を行うことで社会の人々に知られることの恐怖感を作文に書いている。中学生のときに父親を亡くした遺児は、つぎのような思いを綴っている。「高校に入って私は無気力になって何もする気になれませんでした。友達をつくることもせず、ただ一人でいたように思います。それは私の中のどこかに仲良くなったら父親の話が出る、そうしたら父が自殺したことも言わなければならなくなる。そう思って、せっかく仲良くなっても、裏切られるのが怖くて、私は友達を作らなくなっていったのだと思います。私はどんどん内向的になり、無気力で学校にも行きたくなくなりました。また、神経も過敏になってきて、手を何度も洗ったり、忘れ物はないか何度もチェックしてしまうようになり、ますます家にこもるようになりました。」 [2000: 19] この「こわかった」という思いと周囲のかかわりについては、のちほど考察したい。

このほかに、「同情してほしくなかった」 30.5%、「ひとりぼっちだと感じた」 22.1%、「自分ではなにもできないと感じた」 21.1%がつづく。

「自分も死ぬのではないかとおもった」を答えた自死遺児の割合は18.9%である。がん遺児は10.7%であり、自死遺児の比率が8.2ポイント高い。遺児のなかには、親の死を自問自答し、ときに自責の念を持ち、世間の「自殺する人は弱い人ではないか」という感じ方におびえ、自分も死ぬのではないかという思いをいだいた者もいる。

死別の悲しみについては、つぎの質問もおこなっている。「亡くなられたお父さん（お母さん）にたいして、あなたは、つぎのような気持ちを感じたことがありますか。」怒り、自責、うらみなどを主とした選択肢を用意し、いくつでも回答を許した。結果は表2のとおりである。一人平均2.67個の回答が見られた。

多く見られた回答から順にあげる。もっとも多い回答は、「信じられない」60.0%である。次いで、「残された親も死ぬのではないかと思った」34.7%、「私のせいで親が亡くなったと思う」32.6%、「腹がたった」26.3%がある。さらに、「情けなかった」15.8%、「うらぎられた」11.6%、「憎らしかった」11.6%がつづく。自死遺児において、死の否定を6割、遺された親の死の怖れ、自責の念、怒りをそれぞれ3割前後、そして裏切り、憎しみなどの感情について1割強が回答している。

がん遺児と比べてみると、自死遺児が回答する比率はいずれの回答も高いが、とくに、「私のせいで親が亡くなったと思う」、「腹がたった」という感情の回答比率は高い。

「私のせいで親が亡くなったと思う」を答えた割合は、自死遺児32.6%、がん遺児9.1%であり、自死遺児の比率が23.5ポイント高い。中学2年生で父親を亡くした山口くんは、父のおかしい様子を察しながら、亡くなる前日、父が「明るくて元気な顔」をしていたのを見て安心して寝ていたその夜、2時と5時に祖父母に父がいないと起こされた。2時のときは、いつものようにどこかに行ったのだろうと思ってそのまま寝た。5時にまた起こされ、小屋を見に行ったところ、父が車のなかで死んでいるのをみつけた。そして、医者や警察の話を目にし、2時と5時のあいだに亡くなったことを知り、「愕然とし」た。彼は、今の

表2 故人に対する気持ち (M.A) ×死因別

	総数	信じられなかった	私のせいでお父さん(お母さん)が亡くなったと思った	残された(お母さん)お父さんも死ぬのではないかと思った	うらぎられた	情けなかった	腹がたった
全体	(1525)	49.0	12.1	21.4	2.4	5.8	9.3
自死	( 95)	60.0	32.6	34.7	11.6	15.8	26.3
がん	( 506)	52.0	9.1	22.9	1.0	4.5	6.3
	憎らしかった	うらめしかった	ほっとした	このような気持ちになったことはない	覚えていない	N.A	
全体	4.1	1.7	3.0	16.2	13.4	6.4	
自死	11.6	7.4	5.3	9.5	8.4	5.3	
がん	3.8	1.2	3.4	14.4	14.6	5.7	

思いをつぎのように綴っている。「『もしも、ぼくが一回目に起きて行っていれば、父は亡くならなかったんだ、ぼくが父を殺したんだ……』／亡くなった時刻を知らされたその日から、『父を殺したのは、ぼくなんだ』と自分を責め続けました。今でもそんな思いが消えません。まだ幼い二人の弟には何て言えばいいんだろう。父を殺したのは、ぼくなんだ……。『話をしたらどう思うだろう』、そのことを考えると怖くて、彼らに面と向ってはいまだにそのことが言えません。」[2002: 84-85] 遺児たちは、さまざまな面から自分を責めている。小林くんは、父が事故の後遺症で精神的にバランスがとれなくなって家族の看病を必要としていた時期、反抗期で父の看病をできなかったことを、自分が自殺に追い込んだのではないかと考えた [2002: 100]。松村さんは、父が借金のことですずっと家を離れていて、母から出張と聞かされていたところ、父が学校に会いに来たとき、友だちの手前、「早く帰っていいよ」と言ったことを後悔している [2002: 31]。

「腹が立った」を答えた割合も、自死遺児26.3%、がん遺児6.3%と、自死遺児の比率が20.0ポイント高い。故人にたいする怒りの思いは、さきに見た「納得できない」という思いも重なるだろう。また、ほかに、故人のせいだと思ふ気持ちもあるように思われる。久保井くんは、父の自死後、母親が病気でやせ細っていくのを見るなかで、父親のせいにしたくないという気持ちの一方、「父親さえ自殺という道を選ばなかったら、母親はこんなに苦労することはなかったのに……」と思ったという [2002: 113]。

遺児たちは、どうして自分がこのような思いをしなければならないのか、と故人に怒りの感情をもつ一方、親の自死を自分のせいだと自責の念をもつようである。井上くんは、「何でぼくだけこんなつらい思いをしなくてはいけないんだと、悲劇のヒロインのような思いを抱いてい」た。しかし、父が家の駐車場に止めてあるトラックの中で自殺していたことに気づかずにすぐ横に止めてある自転車で学校へ行ったこと、父親が自殺する二週間前に金庫の開け方を教えてくれたのに父親の隠された気持ちに気づけなかったことを思い出し、自分がつらい思いをするのは当然であり、「自分がお父さんを見殺しにしまった気がして、どうしても自分を許せなくなりました」と述べている [2002: 70-71]。

このほかにも、自死遺児の比率は、がん遺児と比べて、「残された親も死ぬのではないかと思った」11.8ポイント、「情けなかった」11.3ポイント、「うらぎられた」10.6ポイント、「信じられなかった」8.0ポイント、「憎らしかった」7.8ポイント高い。自死遺児が、亡くなった親に対して、否定的感情と葛藤をさまざまに抱えている姿が考えられる。



### 3. 周りに隠す／故人について考えることをやめる

自死は、遺児たちに、悲しみ、つらさ、さびしさといった感情に加えて、「納得できない」という理不尽な思い、「こわかった」という思い、故人に対して「腹が立った」という怒り、「私のせいで親が亡くなったと思う」という自責の念などを強くもたらしている。<sup>(4)</sup>

このような思いを自死遺児の多くが抱える背景として、遺された家族にとって自殺がスティグマ (stigma) となっていることが考えられる。スティグマの原義は、奴隷や囚人の体に焼き付けられた烙印である。ゴフマンは、隠したい属性をもつ人が、周囲の人びとに対し、その属性・情報が露見しないよう印象や情報を管理するさまを描いた。

自死遺児の多くは、自分自身も家族も、家族が自死したことを隠すことに努めたことを書いている。ケンジくんは、葬式で死因を隠すよう、母から注意を受けている。「私たち家族は、父の自殺のことを隠して葬儀を行いました。母は、『自殺なんていうことを他人に知られたら、何を言われるかわからない』と言いました。そして、『このことは絶対に他人に言ってはいけない』ともつけ加えました。私は父のしたことを隠さなければならないということに、どこか納得のいかない気持ちもありましたが、世間というのはそういうものかもしれないと思って母の言ったことを守りました。」 [2002: 24]

それはまた、たえず近所や学校の友だちに、死因を隠すことにつながる。高校1年生のときに父親が自死したケイコさんは、つぎのように記す。「家の近所の人には、父は心筋梗塞で亡くなったことになっていたの、私も学校では『心筋梗塞で亡くなった』と言っていた。自分のお父さんの死に対して嘘をつかなければならないことは、おかしいと思っていたけど、それでもクラスのみみんなに知られたくないという思いがあって言えなかった。同時に、『言いたい、知ってほしい』と、そんな気持ちも少しだけあった。」 [2002: 57-58]

隠すことは、遺児たちの心のうちに緊張を強いる。そのなかで、遺児たちは、自死とは隠すだけの理由があると思うようになる。松村さんは、父が小学2年生のときに自死した後をつぎのように綴る。「父が自死したことへのショックは、年月がたつにつれて徐々に大きくなっていきました。『自殺ということは絶対に誰にも言うな、事故だったとでも言いなさい』と親戚中に口止めされ、自殺は悪いことで、父は間違ったことをしてしまったのだと思うようになっていました。父は弱い人間だから自殺してしまいました。父が自殺したということを誰かに話せば、私はみんなに嫌われてしまうだろう、離れていくのだろうと思ひ、父が自殺したことを周りでささやかれているのではないかと、常におびえていました。」 [2002: 32] 彼女は、友だちが親の話をするとその場を離れたり、嘘をついたりした

こと、授業で父のことを尋ねる英語の質問に何も言えず、父の作文を書けずに悔しくて泣いたことを述べ、「そうしていくうちに、しだいに父のことを聞かれることが怖くなり、誰に対しても壁を作るようになってしまいました。どんなに信用している友だちでも、父のことはけっして口にはできなかつたし、しようとも思いませんでした」[2002: 32] と続ける。同様に、「父が亡くなってからの数年間は、自殺は特別な死であると思ひ込み、周りからどんな目で見られるのかが怖くて、どうして私ばかりがこんな思いをしなければならぬのかと、ずっと苦しみました」[2002: 106] と書いている遺児もいる。

そうしたことの積み重ねからか、自死した親について考えることをやめたという遺児もいる。中学二年で父を亡くした斉藤くんは、父の遺体が運ばれてから葬儀までのあいだ泣き続けたけれども、その後、父のいない生活が普通になり、家族の生活が変わったことについて、つぎのように綴る。「何がいちばん変わったのかといえば、泣かなくなったことです。あれだけたくさん泣いたのに、いつの間にか泣かない自分がいました。泣くのを封印している自分がいました。それは同時に、父の存在を封印していたのです。父を忘れようとしていました。そして忘れていきました。なぜなら思い出すとつらくなり、つぶされそうになるから。／考えると最後は父の自殺にまで気持ちが行き着くので、その手前で考えるのをやめます。それをくり返していくうちに、私は生きる手段として、父のことを忘れる選択をしていたのです。いや、今思うと、それでしか一人で生きていくことができませんでした。父を忘れ、考えないことが、唯一の生きる術だったのです。」[2002: 39]

隠さざるを得ないがゆえに、故人を忘れていく。それは、自死遺児における悲哀の仕事を難しくすることが考えられる。なぜなら、誰かに話すことは、悲哀の仕事を促す有用な手立てになっているからである。小此木啓吾は、『対象喪失』で、悲哀の仕事のうち死別によるそれを「喪の仕事」と名づけ、その喪の仕事はそれにともない絶望、孤独、寂しさで心の中がいっぱいになり、苦痛がもたらされるが、その苦痛から救われるひとつの道として、死者への思いを誰か良い聞き手に語ることがあると述べている。そして、「現代社会では、かならずしも宗教家ではない家族・友人をはじめ、誰かがこのような転移の対象となって、『転移の中の喪の仕事』をともにする」とも述べている [小此木 1979: 101-102]。

しかし、自死について家族で話し合うことはほとんどないように思われる。8歳のときに父親を亡くした遺児は、19歳になるまで、父はなぜ死んだのか、という質問を家族にすること、話題に出すことを「何となく避けてきた」という。「つい数年前まで自分の父親が何で死んだのか分からなかった。病死だったのか、事故だったのか。／私の家族の間で父親のことが話題にのぼることはほとんどない。とくに父の死については、父の死後—

度もないのではないかと思う。母親に対して『お父さんは何で死んだの』という質問はすることのできない質問だった。／何となく避けてきた。父が死んだとき、母親が泣き崩れていたのは覚えていたから。父の死後、10年以上も私と私の家族は父の死のことに触れることはなかった。それは他の人から見れば不自然なことかもしれないが、私たち家族にとっては『自然な』ことだった。」[2000: 21] 何かあるのかもしれないと察しながら、母がかつて泣き崩れていたことを覚えており、父の死については何も触れないで過ごすことを自然としていた。19歳になってはじめて父の死を母に尋ね、そこではじめて父の死が自殺であることを知った。それから、父のことを考えるようになり、さらに考えるために母と一対一で父の話をするできるようになった。

親との話し合いが難しいのは、遺された配偶者は、子どもと同様に、あるいは配偶者ゆえに子ども以上に、理不尽な感情、怒り、怖れ、自責の念を強くもち、悲哀の仕事がたく苦しいものになっていることが考えられる。子どもは、そのような親の状況を察知し、知らないふりをし、家族全体で話題を避けてもいるのだろう。家族で話し合うことによって、死別の悲しみを受けとめ、悲哀の仕事をとにもすることは難しいように思われる。

#### 4. つどいでの出会いと「自殺」を口にすること

つどい、「自分を語ろう」というプログラムに大きな衝撃を受けたという自死遺児は多い。かれらは、遺児仲間、とくに自死遺児と出会い、「自分だけが特別ではない」と思い、そして、「自殺」という語を一言口にすることで気持ちが楽になったと述べる。

つどいの「自分を語ろう」というプログラムで、ほかの人の自分史語りを聴いた感想を質問票調査で尋ねている。『「自分を語ろう」でリーダーや班員の話聞いて、あなたはどう思いましたか。』いくつでも回答を許した。結果は表3のとおりである。一人平均2.64個の回答が見られた。

もっとも多かった回答は、「自分と同じような思いをあげわっている人たちがいた」69.5%である。次いで、「いろいろな悲しみがあることを知った」64.2%である。このあとに、「この人たちになら自分のことを話してもいいと思った」43.2%、「自分でも聞いてあげられるんだと思った」28.4%、「つらかったり悲しかった体験を話してもいいと思った」21.1%、「あなたが悪いんじゃないよ、と思った」15.8%がつづく。

「自分と同じような思いをあげわっている人たちがいた」は、がん遺児52.6%であり、自死遺児では16.9ポイント大きい。他方、がん遺児の比率の大きい回答は、「いろいろな

表3 「自分を語ろう」を聞いた感想 (M.A) ×死因別

	総数	自分と同じような思いをあげられている人たちがいた	いろいろな悲しみがあることを知った	あなたが悪いんじゃないよ、と思った	自分でも聞いてあげられるんだと思った	つらかったり悲しかった体験を話してもいいんだと思った
全体	(1525)	51.7	73.2	23.8	36.4	21.3
自死	( 95)	69.5	64.2	15.8	28.4	21.1
がん	( 506)	52.6	73.3	24.5	33.2	20.0
	この人たちに なら自分のこ とを話しても いいと思った	気持ちを話せ ていることが うらやまし かった	人の話聞きた くなかった	その他	N.A	
全体	46.2	7.3	1.7	6.0	2.2	
自死	43.2	7.4	1.1	5.3	3.2	
がん	46.6	8.1	1.8	4.3	2.0	

悲しみがあることを知った」8.9ポイント、「あなたが悪いんじゃないよ、と思った」8.8ポイントである。がん遺児は、さまざまな死別の悲しみを感じ、自分を責める遺児に「あなたは悪くない」という思いを強くもつようである。他方、自死遺児は、「同じような思い」に接することに、強く心が動かされているようである。

「同じような思い」とは、どのようなものか。作文集によると、遺児のなかには、「自分を語ろう」というプログラムで、ほかの遺児の話聞き、「自分だけがつらいわけじゃない」と思って、自分も話したい気持ちになり、話したというばあいが見られる。しかし、他方で、病気遺児などが「死にたくないのに死んだ」と語るのを聴いて、自分の親は死にたくて死んだのだろうか、と思うばあいもある。

それゆえか、自死遺児との出会いに特別な思いをもつ遺児も多い。山口くんは、「ほんとうに、そこで初めて『ぼくはひとりじゃないんだ』と思えるように」なったと感じている [2002: 88]。藤田さんは、2度目のつどいで自死遺児と「衝撃的な」出会いをしたことを、つぎのように述べる。「自分史を語る時間の最初に、同じ班の大学生が話をしてくれた。彼の最初の一言を聞いたとき、驚いて息が止まりそうになった。／彼は、『自分の父親は自殺で亡くなった』と言った。私と同じだ。胸の奥が熱くなって、彼の話に引き込まれた。自分と同じ体験をもつ人がいたということに、すごく安心した。彼といろいろな話をするうちに、父のことをもっと知りたくなった。自分と同じ体験をしてきた人に出会って、初めて父の死に対して目をそらさずに考えられるようになった。」 [2002: 94-95] (波線筆者) 久保井くんは、自死遺児だけのミーティングで、自殺で親を亡くした経験をもつ人が、自分以外にもたくさんいたことに驚き、彼らと自分の経験の重なる部分の多さを思

い、ほかの話を聴くことで、「初めて自分の気持ちに気づいた」という [2002: 114]。親の自死を口にしなかった、隠してきたような、経験、思いをもっているのは、自分ひとりだけではないことを知り、それによって安心し、初めて自分の思いやその死を考えることができた、と彼らは綴っている。

「自分を語ろう」で語った感想についても質問票調査で尋ねている。「今回のつどいで、亡くなった、あるいは障害をもった親のことを話してどう思いましたか。」いくつでも回答を許した。結果は表4のとおりである。一人平均2.33個の回答が見られた。

もっとも多くみられた回答は、「ちゃんと話を聞いてくれてうれしかった」51.6%、「近所や学校の友だちに言えないことを話した」48.4%、「いろいろ話すことができてすっきりした」44.2%の3つである。自分の親の自死について話を聞いてくれる人がいることの喜び、他の人に言えなかったことを話したこと自体の喜び、また話したことによる開放感を回答した比率は自死遺児の半分を占める。このあとに、「誰にも言うてはいけなと思っていて話を話せてホッとした」20.0%、「もっと話したかった」18.9%、「自分の悲しい気持ちや苦しい気持ちに気づいた」16.8%がつづく。

自死遺児において、「近所や学校の友だちに言えないことを話した」、「誰にも言うてはいけなと思っていて話を話せてホッとした」を回答した割合は、がん遺児に比べて高い。「近所や学校の友だちに言えないことを話した」の回答比率は、自死遺児48.4%に対し、がん遺児33.4%であり、自死遺児で15.0ポイント高い。同様に、「誰にも言うてはいけなと思っていて話を話せてホッとした」の比率も、自死遺児で7.9ポイント高い。

ケンジくんは、そのときのことをつぎのように書いている。「そこで私は決心して、初

表4 「自分を語ろう」で話した感想 (M.A) ×死因別

	総数	近所や学校の友だちに言えないことを話した	ちゃんと話を聞いてくれてうれしかった	いろいろと話すことができてすっきりした	誰にも言うてはいけなと思っていて話を話せてホッとした	自分の悲しい気持ちや苦しい気持ちに気づいた	自分ばかりを責めるのをやめようと思った
全体	(1525)	37.5	57.1	45.1	16.1	21.4	6.2
自死	( 95)	48.4	51.6	44.2	20.0	16.8	4.2
がん	( 506)	33.4	57.5	46.0	12.1	22.1	7.3
	もっと話したい	形どおりに話してすませた	話さなければよかったと思った	親のことは話したくなかった	その他	N.A	
全体	22.0	3.3	1.0	4.3	8.3	5.5	
自死	18.9	3.2	1.1	7.4	12.6	2.1	
がん	20.0	2.6	0.4	4.5	7.3	5.9	

めて人前で父の自死の話をしました。できるだけ動揺しないように話そうと思っていたのですが、『自殺』という言葉を出すときは、喉が詰まりました。(中略) / そんな話をしたらみんなが驚いて、私に対する態度が話す前と変わってしまうのではないかと感じていましたが、実際にはまったくそんなことはありませんでした。父の自死のことを話すのはつらいことでしたが、口に出して話をするので、ほんの少しだけ自分の心が軽くなったような気がしました。」 [2002: 26]

遺児たちは、「自分を語ろう」で話そうと思っても、「自殺」という言葉がなかなか口にできなかった。これまで周りに知られることで態度が変わることを恐れ、のみこんできた言葉である。その言葉を口にした後、遺児たちは、涙が止まらなくなったこと、話が終わった後はすっきりした気持ちになったこと、「胸の奥底にためつづけていた思いがスッと楽になったこと」 [2002: 87]、「何ともいえないつらい心細い気持ちがあふれてき」たのと「同時に声に出して話すことで、救われたような気持ちになれたこと」 [2002: 28] などを綴っている。「自殺」を口にすることで、これまで誰にも言えなかった思いが、堰を切って溢れたことが、さまざまな言葉で表現されているように思われる。

そして、仲間と言葉を交わすことでまた、気持ちが楽になることも、遺児たちはさまざまに綴っている。ノブくんは、「誰のせいでもない」という言葉で、「今まで抱え込んできたものが、ずっと軽くなった気が」した [2002: 50]。松村さんは、「死因なんか関係ない。みんな同じだよ」というリーダーの言葉で、「父のことを初めて認めてもらえたような気が」した [2002: 33-34]。小林くんは、「お父さんは頭を打っていたのだからしょうがないよ」という仲間の一言で、「初めて人に受け入れられた」気がした [2002: 101]。井上くんは、「もう無理せんでいいよ。泣きたいときには、泣けばいいんよ」という一言で、「ずっと一人で背負っていた重荷が軽くなったような気がし」て、冷静に父のことを考えることができるようになった [2002: 72]。斉藤くんは、「ほんとうにつらいことは言わなくてもいい」という言葉で、言えない自分を分かってくれる人がいると感じた [2002: 41]。仲間の言葉をきっかけに、自分ひとりが抱えなくていいことを、素直に思うことができるようになる遺児の姿が考えられる。

## 5. 故人の生き方の別のありようを思う

自死遺児たちは、つどいに参加し、親の自死を口にするので、さまざまなことを考え始めるようである。

つどいに参加した直後の感想についても、質問票調査でつぎのように尋ねている。「今回のつどいに参加して、次のような気持ちが生じましたか。」複数回答を許した。結果は表5のとおりである。一人平均3.23個の回答が見られる。

回答の多かった順に見ておきたい。「遺児の仲間と出会えてよかった」61.1%、「自分について見つめ直すことができてよかった」50.5%、「残されたお母さん（お父さん）の苦勞をかんがえてみよう」50.5%、「これからの生き方をかんがえてみよう」46.3%である。遺児仲間との出会い、自分についての見つめなおしとこれからの生き方、残された親の苦勞に思いをはせる回答が、半分近く、半分以上を占める。このあとに、「リーダーのような人間になれるようがんばろう」33.7%、「亡くなったお父さん（お母さん）の生き方をかんがえてみよう」30.5%、「街頭募金などあしなが育英会の活動に参加したい」23.2%がつづく。遺児は、「奨学生のつどい」において数日を共に過ごし、普段話さないことを話したり、聴いたりした最終日、仲間を感じ、自分や親のこれまでを振り返り、これからの自分の生き方を思った。それに加えて、先輩であるリーダーを目標にし、会の活動への参加を思い、また、故人の生き方を考えようとしている姿が浮かび上がる。

「自分について見つめ直すことができてよかった」を答えた割合は、自死遺児50.5%に対しがん遺児61.5%である。自死遺児の比率は11.0ポイント低い。先に、自分を責める気持ち、故人への怒りや、怖れの気持ちの強さを見た。そうしたことが重なり、自死遺児は、自分を見つめ直すことがすぐにできない状況にあることが考えられる。

「亡くなったお父さん（お母さん）の生き方をかんがえてみよう」を答えた割合は、自死遺児30.5%、がん遺児22.7%であり、自死遺児の比率がわずかながら7.8ポイント高い。

表5 今回のつどいに参加した後の気持ち (M.A) × 死因別

	総数	自分について見つめ直すことができてよかった	これからの生き方をかんがえてみよう	遺児の仲間と出会えてよかった	リーダーのような人間になれるようがんばろう	街頭募金などあしなが育英会の活動に参加したい
全体	(1525)	61.7	48.5	58.7	39.3	27.3
自死	( 95)	50.5	46.3	61.1	33.7	23.2
がん	( 506)	61.5	49.8	56.7	39.1	25.3
	亡くなったお父さん（お母さん）の生き方をかんがえてみよう	残されたお母さん（お父さん）の苦勞をかんがえてみよう	つどいのような場にはもう関わりたくない	なにもかんがえることはできない	N.A	
全体	23.0	45.2	1.7	1.6	2.0	
自死	30.5	50.5	2.1	4.2	2.1	
がん	22.7	51.8	1.2	1.6	0.4	

ただし、参加回数別に確認したところ、1回目の参加者57人中、答えた人数は13人の22.8%であった。2回目の参加者22人中、答えた人数は6人の27.3%である。さらに、3～4回の参加者8人中6人(75%)、6回以上の参加者7人中4人(57.1%)である。6回以上の参加者は、シニアリーダーなどを務め、自死遺児支援を呼びかける活動に加わっている可能性も高い。母数がたいへん少ないため、一概に言いきれないが、その当時、つどい、育英会の活動に深く関わる自死遺児ほど、故人の生き方を振り返り、考えようとしていたことが考えられる。

では、遺児たちは、故人のことを、どのように考えているのだろうか。作文集によれば、自死遺児たちは、つどいにおいて「自死」という言葉を口にすることで、その事実に向き合い、親の自死を繰り返し考えるようになり、しだいに、やむにやまれなかった、苦しみぬいた親の姿を見出し、自分を捨てたわけではないという思いを得ているようである。

高校1年生のときに父親を自死で亡くしたケイコさんは、3章でもみたように、近所でも学校でも父は心筋梗塞で亡くなったと言っていたが、つどいで、自殺と言う言葉を口にした瞬間、涙が出て、言いたいことが次から次へ出てきた。その後、専門学校生となり、自死遺児支援、自殺防止の呼びかけの活動を行うなかで、つぎのような思いを得た。「私は活動していくなかで、自分の過去を振り返る機会が多くなり、お父さんのことを考えるようになった。最初は勝手に死んでいったお父さんが許せないと思っていたけど、他の人の話を聞いたりお父さんの気持ちを想像して考えたりするうちに、お父さんはつらかったんじゃないかと思えるようになった。どうしてお父さんは自分で死を選ばなければいけなかったのか？どうしてそこまで追いつめられていたのか？と考えるようになった。考えているうちにお父さんが亡くなったときのことを知りたくなくて、二十歳になってやっとお母さんにお父さんのことを聞くことができた。」[2002: 60] (波線筆者) 彼女は、会社での父の苦勞を聞き、自死にいたるまでの父の思い、行動を綴る。そのように、父の生き方を辿りなおすことで、かばんに走り書きのメモを残していたこと、亡くなる前の晩、野球仲間に来年の監督をやりたいと話していたことから、「ほんとうは自殺するつもりなんかなかった」けれども、「いろいろなことが重なって」父の自死が「起きてしまった」と考え、つぎのように続ける。「『自殺は弱い人がすることだ』と言う人がいるけれど、(略) 決して弱いだけの人じゃなかった。お父さんはまわりの人のことを考えられるやさしい人だったし、あんなに必死になって会社を守ろうとしたのは、きっと責任感が強い人だったからだと思う。(略) 父親として、とても尊敬できる人だった。そんな父が自分で死を選ばなければいけなかったのには、自分だけではどうにもならないような理由もあったんだ



と思う。」[2002: 63-64]「許せない」と思っていた状態から、父の生前の様子を知るようになるなかで、「ほんとうは自殺するつもりはなかった」「自分だけではどうにもならないような理由もあった」という思いにいたっている。

松村さんは、「父は私たち家族が不幸になることを望んでいたのはなく、幸せになってほしいと願っていたのだと信じ」、「私たちを守るために、やむをえず下した決断だったはず」と思い、また、「父は車のフロントガラスに私と兄の写真を残していた」ことを、「今年になって初めて」知り、それによって、「父に嫌われていたのだという気持ちがすべて払拭され」、「私も父に愛されていたんだと、父の死後、初めて感じる事ができ」たこと、「だから今は、父のことを大好きだと自信をもって言え」ということを述べている [2002: 35]。

山口くんは、「つどい」をきっかけに、「父の気持ちを考えるように」なり、「父が唯一残した手帳の言葉」にあった、「兄弟三人の名前があって、ただ『ごめんね』とある四文字」について、「亡くなった直後に見たときは何も感じ」なかったけれども、「『つどい』を幾度か経験するなかで『きっと他に言葉が出なかったのだろう』と思い」、「私たちを残さずから命を絶つことへの悔しさやつらさがきつとあったのだろうと」思うようになったという [2002: 87-88]。

久保井くんは、自死遺児のミーティングのなかであしなが育英会の職員の、「自殺した父親は、みんなを見捨てて死んでいったのではない……」という言葉をきっかけに、「自分の家族だけは守ろうとして、自殺という道を選んだのかもしれない」と考え、「父親に対して恨みに近い思いを抱いていた自分が、とても申し訳ないように」思い、後に、「今まで意識的に考えることを避けてきた父親のことを、少しずつ考えるように」なったと振り返っている [2002: 114]。

藤田さんは、あしなが育英会主催の自殺防止のためのシンポジウムで、「うつ病とは、ほんの些細なことで不安になり、何に対しても無気力になってしまい、自分が生きている意味がないように思える病気であることを知り」、「生きていることが重荷になる病気なんだ」、「死にたいから死ぬんじゃなくて、生きていることから逃れるためには死ぬしかないんだ。死にたいから死ぬのと、生きていたくないから死ぬのとでは大きな違いがある。父は、ほんとうは死にたくなかったんだろうと思った」ことを綴っている [2002: 96]。

作文集に寄稿した自死遺児たちの多くは、故人が生きようと思っていた、私たちが愛していた、本当は悔しかった、本当は死にたくなかったという思いを得ることで、「回復」の途を見出しているようである<sup>(5)</sup>。

そして、その途上で、自死のおきない社会、自死者年間3万人の数が減るような社会、

また、自死遺児、遺族の苦しみ、悲しみが理解される社会などをつくることを目標に掲げ、自分の言葉で伝えたい、社会の自死に対する差別や偏見をなくしたいと思い、幾人かの遺児は、『自殺って言えなかった。』や活動のなかで、名前を公表した。

遺児たちが、自死のおきない社会を願うのは、自死もまた社会の産物と考えるからである。ノブくんは、どうして自死者が3万人も出る社会なのだろう、と思うことで、父の自死を受け入れることができたという [2002: 51]。井上くんは、「社会が苦しんでいる人を受け入れてくれたなら、自殺者は今より減っていくのではないのでしょうか」と綴る [2002: 74]。「自分が父のサインに気づいていれば父は助かったかもしれない」という思いで苦しんでいるナオユキくんは、「ぼくが今この文章を書いているのは、もっと多くの人が苦しんでいる人の存在に気づき、手を差し伸べてあげてほしいからだ」と述べる [2002: 18-19]。自死者の苦しみを思うがゆえに、苦しみに手が差し伸べられる社会を願い、その思いや、遺族の悲しみ、苦しみをメディアで訴える活動を行い、自ら名乗ることで、隠そうとさせる社会の差別や偏見への対抗をはかる。

しかし、その一方で、遺児たちは、手記を書くことや、上のような目標を掲げることをためらう思いも綴っている。松村さんは、「文章にすることを何度もためらい、これがほんとうに正しい選択なのかと不安になることもありました」と感じながら、ひとりで悩み苦しんでいる自死遺児が勇気を持つきっかけになることを願い、手記を寄せている [2002: 35]。山口くんは、「自殺が減ってほしい」という気持ちがあるけれども、「減ってほしいと訴えると、父の死を否定しているような気がして、やはり怖い」と思うこと、減ってほしいと口に出すほど、「父が亡くなったことがすごく惨めに思えることがある」という思いを記す。しかし、「声を出せないでいる多くの遺児や遺族のために」、「文章を書いたりお話をすることは、体験をしたぼく自身にしかできないこと」ではないかという思いも綴る [2002: 90-91]。ためらいながら、自死遺児は活動を積み重ねてきたことがうかがえる。

## おわりに

これまでの考察をまとめておきたい。親の自死は、遺された者に、理不尽な感情、恐怖感、自責の念、怒りなど、さまざまな心理的困難や葛藤、緊張をもたらしている。そして、遺児、遺族にとって、家族の自死はスティグマのようになり、亡くなった親について考えることをやめ、家族同士で話さないばかりが多くみられた。

そのなかで、つどい、「自分を語ろう」への参加は、自死遺児が、自死を口にするきつ

かけをもたらす。自死遺児は、つどいへの参加を重ねるなかで、亡くなった親について考えはじめる。そして、故人が苦しみ、どうしようもなく、死にいたったという思いを得た遺児たちは、だからこそ、自死者の減るような社会のしくみづくりを目標に掲げ、自死遺児、遺族の支援を呼びかける。

本稿は、資料の性格上、呼びかけの活動を行う自死遺児たちの考えの特徴を描いた面が強くなった。しかも、その整理は、自死遺児たちが提示する枠組みに沿っているように思われる。本来であれば、なぜ、このような枠組みをもつにいたったか、それは何を意味するか、という考察こそ重要であろう<sup>(6)</sup>。それらの考察は、今後の課題としく考える。

[付記] 本稿は、あしなが育英会委託の自死遺児調査にもとづき、2002年の第50回関東社会学会大会にて報告した原稿に、大幅に加筆したものです。自死遺児調査結果を使用を了承していただいた、あしなが育英会、副田義也氏、樽川典子氏、加藤朋江氏、株本千鶴氏、時岡新氏のご厚意に深く感謝いたします。

#### 注

- (1) 小此木がフロイトのmourning workにあてた訳語である。彼はボウルビーの定義にしたがい、「対象喪失によっておこる、一連の心理過程を悲哀または喪 (mourning)、この悲哀の心理過程で経験される落胆や絶望の情緒体験を悲嘆 (grief)」とよぶ [小此木 1979: 45]。小此木によれば「悲哀の仕事」はボウルビーの定義する悲哀に当たる。なお、「悲哀の仕事」は対象喪失にともなう、錯綜した、思慕の情、怨み、憎しみ、償いの心などの反応をひとつひとつ体験し、解決していく自然な心の営みともされており [小此木 1979: i]、「悲哀の仕事」には怒りや憎しみに対応する心理過程も含まれる。近年ではグリーフ・ワーク (grief work) という言葉も用いられ、若林はこれを「悲しみの変容過程」とよぶ [若林 2000: 205]。mourning、mourning work、grief workの概念は近似の心理過程を指していると考えられる。
- (2) あしなが育英会は病気や災害等で親が亡くなったり、重度後遺障害である家庭の子どもたちに奨学金を貸与する団体である。
- (3) 文集2冊は、考察において数多く引用する。それゆえ、以後は、引用文献表記において、編者名を省略する。たとえば、『自殺って言えない』14頁を引用したばあいは [2000: 14] と記し、『自殺って言えなかった。』14頁を引用するばあいは [2002: 14] と記すこととする。
- (4) 自死遺族の悲しみは、ほかの死による遺族の悲しみと異なる様相があることは、悲嘆心理学的研究でも確認され、グリーフ・カウンセリングの概説書でも指摘している。たとえば、ウォーデンは、自殺者の遺族に特有な感情体験として、恥辱感／罪悪感／怒り／恐れ／思考の歪みをあげている [Worden 1991]。
- (5) これは、野口が指摘する、セルフヘルプ・グループによる「回復の物語」の形成と思われる。野口は、セルフヘルプ・グループには固有の「回復の物語」があり、誰に命令されるわけでもなく、多くのメンバーがよく似た「回復の物語」を語る現象に注目する [野口 2001: 16]。「物語は個人の経験に輪郭を与え整序する枠組として機能」しており、『物語の定型性』は、個々人の物語の個性性を保障する受け皿として機能している」という。『物語』が『語り』を促し、『語り』が『物語』を補強する [野口 2001: 18]。遺児たちは、つどいで、ま

た自死遺児の苦しみを訴える活動を行うなかで、仲間同士でたえず経験や思いを語りあい、聴いた。2002年の作文集は、相互に影響を受けた物語が綴られている。自死遺児仲間たちのあいだで語り、聴き、そして作文集に綴った自分史は、個別でありながら定型の「回復の物語」と考えられる。

- (6) 若林は、『自殺した子どもの親たち』のなかで、子を自死で無くした親たちの悲しみを描き、最後のほうで、子どもの立場と親の立場のちがいについて述べている。[若林2003: 187-190]。

#### 参考文献

- Fine, Carla 1997 *No Time to Say Goodbye: Surviving the Suicide of Loved One*. 飛田野裕子 (訳) 『さよならも言わずに逝ったあなたへ—自殺が遺族に残すもの』扶桑社 2000.
- 自死遺児編集委員会・あしなが育英会 (編) 2000 『自殺って言えない—自死で遺された子ども・妻の文集』あしなが育英会.
- 自死遺児編集委員会・あしなが育英会 (編) 2002 『自殺って言えなかった。』サンマーク出版.
- 野口裕二 2001 「集団療法の臨床社会学」野口裕二・大村英昭 (編) 『臨床社会学の展開』有斐閣.
- 小此木啓吾 1979 『対象喪失—悲しむということ』(中公新書) 中央公論社.
- 副田義也 2001 「自死遺児について」副田義也 (編) 『死の社会学』岩波書店 pp.195-210.
- 副田義也 2002 「自死遺児について・再考」『母子研究』22:21-37.
- 若林一美 1994 『死別の悲しみを超えて』岩波書店. →2000 (岩波現代文庫).
- 若林一美 2003 『自殺した子どもの親たち』青弓社.
- Worden, James William 1991 *Grief Counseling and Grief Therapy: A Handbook for the Mental Health Practitioner* (second edition). 鳴澤實 (監訳) 『グリーフ・カウンセリング—悲しみを癒すためのハンドブック』川島書店 1993.